

ダンテの地上樂園

大類伸

一 中世の地上樂園

ダンテの地上樂園は「神曲」淨罪篇の終末を占めて居り、其の第二十八歌から第三十三歌までの六歌がそれである。ダンテはローマの詩人ヴァージルに導かれて、恐しい地獄の暗黒世界から嶮しい淨罪の山を攀ぢて次第に自己の罪から淨められつゝ、遂に淨罪の山の絶頂に達した、そこが即ち地上樂園(Paradis Terrestre)である。そこからしてダンテは天國に昇る。即ち地上樂園は淨罪界と天國との間に在る場處で、現世に於て人間の力で到達し得る最も幸福な理想境である。地上樂園には天地創造の時、人間の祖先たるアダムとエヴァとが置かれた場處であつたと云ふ。其のアダムとエ

ヴァとが智慧の果實を食べてそこを追はれて以來人間はそこに住まなくなつてしまつた。基督教の盛んな中世に在ては、其の地上樂園を追求して已まない風が盛んであつた、それは理想國に憧憬する古代人や近代人の心と同じであつた。

中世紀に多く行はれた世界圖(Mappa Mondo)に依れば、地上樂園は世界の極東の地方であつた。そこは山脈や又は海に依て圍まれ、普通には到達し難い場處であつた。世界圖の多くには PARADISE など記され、或はそこにアダムとエヴァと更に智慧の樹と蛇とを描いたものさへもある。古圖の常として東方を上方とするが、従て圖の最上部即ち世界の極東を占めて居るのが地上樂園であ

る。東方は日の出づる處として崇められた故、地圖に於ても東方が上位を占めて居る。此種の地圖は十世紀から十二世紀にかけて多く現はれた、その一例は S. Severo & Enrico di Maganza などの世界圖である、十三世紀の有名な世界圖 Hereford Map の如きも亦その一例である。それ等の到達され難い地上樂園を追求するの念は、中世後半期に於て特に盛んになつて來た、十一世紀から十三世紀にかけて樂園傳説の文學的作品が多く現はれたのは以上の結果に外ならない。

二 樂園傳説の一例

樂園傳説の一に「三修道僧の物語」と云ふのがあ
るが、これは樂園傳説の相當初期に屬するもので
十世紀以前に屬するとの説である。但し其の後改
作の手が加へられて、十三世紀には可成りに美し
い物語となつたのである。これは三人の修道僧が
或る河のほとりを徘徊して居た時、河の上流から

美しい樹の枝が流れて來た、其の枝は芳香に満ち
た果實や美しい色に彩られた葉などに飾られて居
た。その枝を見て上流の麗しい林園を想像した修
道僧は、思はず知らず流れに沿うて河を溯つた、
さうして幾日かの後遂に樂園の山に達した。山上
には快美を極めた林園があり、美果と芳香とに満
ちて居たが、樂園の門には天使が火の劔を持つて
護つて居る故、容易に入ることが出來ず、三人の
僧はその門前に留つて考へること五日五夜にして
辛くも天使の許可を得て數日間を限つて園内に入
ることが出來た。園内にはエノック、エリアの兩
長老が昔からそこに居つたが、三人の僧は此の兩
人に導かれて樂園の諸處を見物し、不老の泉や光
榮の樹や數多の驚異を眼のあたり實見して、やが
て再び現世に歸つて來たのである。

此の三修道僧の物語は、中世樂園傳説の内夢
幻的な空想的な點に於て最も美しいものであるが

かゝる閑靜にして爽快なる樂園の記述は、十二、三世紀に至つて一層活氣を帯びた幾多の冒險的興味を賡る物語となつて來た。それは中世末期に人心に溢れて來た生命感の躍動の一端と見られる、ロマネスクに満足しないでゴティックを生み出したと同じ現象であらう。かくして樂園傳説は賑かしい形相をもつ探險譚となつて現はれた、固より十七世紀頃の海外探險熱から生れたロビンソン・クルーソー漂流譚の如きものではなく、結局宗教萬能時代の產物として、宗教的理想の讚美の爲めの探險譚となつては居るが、地上的な形相の快美さに憧れて已まない時代の儂が、よくそこに窺はれるのである。此種の物語では S. Patrizio, Albérico, Tundalo, Brandano 等の物語が有名であるが特に最後の Brandano の物語が代表的である。ブランダーノの樂園探險は十一世紀頃の作と云はれるもので、特にダンテの神曲と少からぬ關聯

があるを認められて居る。ブランダーノはアイルランドの僧侶であるが、西方の海洋中に聖徒の住む樂園が在ると云ふことを聞いて、そこに到達したい熱望に驅られて、同志の者と共に船に乗つて出發する。さうして幾多の冒險を重ねた後に、遂に海中に聳えた高峰を認めそこに上陸する。これが地上樂園であつて全島常緑の樹林に蔽はれ、美果と珍鳥と其の間に充滿して居る。殊にその島は全く光明世界であつて夜は無い、蓋しそれは日月の光でなくして基督の光だからである。此の光明の樂園に留ること四日でブランダーノの一行は無事に修道院に歸つた。この物語に於ける樂園の記述はダンテの場合と類似した點が少くない、殊に樂園を海洋中の高峰の頂に置いた點に於て一致して居り、又樂園の中央に非常に高い一本の喬木があることも同じである。

以上の三修道僧の物語と、このブランダーノの

探檢譚とは、恐らく中世樂園傳説の二つの型を示したものであらう。一は大陸の遠隔地方に樂園を置き、一は又海中の孤島にそれを置いて居る。又バトリツイオの物語では、樂園は洞窟の奥の暗黒世界を過ぎた後に發見される壯大な城壁の内に在る。かく各自の間に多少の差はあるが、結局それ等の趣旨は敬虔の聖僧が信仰の徳に依て、到達され難い樂園に一時の滞在を許され、快美の樂土に恍惚とした後再び現世に歸ると云ふ點に於て一致するのである。固より其の樂園に到達する爲めには旅行の途上に、幾多の艱難や恐怖すべき事件に出會するが、信仰の力は無事にそれ等を通過せしめたのであつた。それは正しくダンテの淨罪界に比較さるべきである。さうして其等の中世的な樂園傳説に、一層深い意義と詩的な形相とを與へたものはダンテの「神曲」であつた、要するにダンテの「神曲」特にその地獄や淨罪界の記述は、その前

驅者たる中世傳説に負ふ所が少くないと認められる。

三 ダンテの地上樂園

前に述べた如く、ダンテの地上樂園は淨罪の山の頂に在る。ダンテはヴァージルと共に此の常緑の樂土に踏み込むのであるが、そこには美しい少女マテルダが居るのみで、他に人間は一人も居らない。しかもダンテは最初此の美しい林野に踏み入つて、美しい少女マテルダを見、さうして其の少女の案内に依て林の間を進んで行くが、其の僅かの時間の間だけ爽快の氣分を味つて、恐しい地獄の光景や嚴しい淨罪の苦みから救はれた心地になるが、彼の此の氣分は直ちに破られて、再び嚴酷なる筈は彼の心に下されねばならなかつた、ベアトリチェの出現がそれである。

ベアトリチェは云ふまでもなく、神曲全篇を通じてダンテの憧憬の的である、しかし其のベアト

リチエがダンテの面前に現はれて来るのは、神曲に在ては淨罪篇の末尾即ち地上樂園に於けるのが最初である。ダンテが少女マテルダに導かれて地上樂園の林の中を、レテの流れに沿うて進んで行くこと、間もなく基督敎會の捷利を意味する壯麗な行列に出會する。その行列の中央には敎會を象徴する凱旋の車が進んで来るが、行列がダンテの前で止まり、行列中の聖徒の歌が謠はれると、天から花が降り注いで、車の上にベアトリチエが天降る。其の光りと悦びとに満ちた光景の記述を以て淨罪篇第三十歌は始まるのである。『新生』の少年時代よりの憧憬の的であつたベアトリチエの姿を看て、ダンテの心は亂れた、さうして慈父にも等しいヴァージルの助を求めようとしたが、ヴァージルはもはや消え去つて居らない。頼るべき人を失つたダンテは失望の餘り遂に泣き出すのであるが、其のダンテの上に恐しい詰問の語がベアトリ

チエの口から投げられる。『ダンテよ、ヴァージル去れりとて未だ泣くべからず、未だ泣くべからず、汝はやがて別の劔の爲めに泣くべければなり』と (Purg. XXX. 53-57) これがベアトリチエが直接ダンテに向つて語つた最初の語である。それから引續いて鋭い詰問がダンテの上に浴せかけられる、『われを看よ、われは實に、われは實にベアトリチエなり、汝は何故にこの山に登るに至りしぞ、こゝに人間は眞の幸を享くることを知らざるか』 (Purg. XXX. 73-75) ベアトリチエの鋭い語は更に鋭さを加へて、詰問は第三十一歌にまで續いてゆく。實に第三十歌は次の様な句で終つて居るのである、『涙を流すの深い痛みを経ずして、此のレテの流れを渡らしめば高き神の捷は汚されたるなり』と (Purg. XXX. 142-145)

この峻烈を極めたベアトリチエの責問に對してダンテは殆ど一言の辯解をなし得ないで、たゞ

深い悔恨の思ひに沈むのみであつたが、やがて其の悔改めの結果としてレテの流れを渡つて、對岸に赴きベアトリチエの近くに行くことを許されるのである。さうしてダンテとベアトリチエとの間に、和解(?)が成立つた後、基督教會墮落の歴史を示す幻影を目撃して、ベアトリチエからそれに関する説明や、救済の豫言を聞いた後ダンテはいよいよ天國に昇ることとなり、こゝに淨罪篇の末尾即ち地上樂園の記述は終つて居る。

四 ダンテの立場

上に述べた所に依つて、ダンテの地上樂園が極めて峻嚴な意味をもつて居ることは明かであらう。そこに現はれて來るベアトリチエには、少女の優さ乃至女性の心弱さは毫も認められない、ダンテに臨む彼女の態度は恰も嚴しい母の如きものがある、寸毫の邪惡をも徹底的に追究せねば已まない鋭さがある。最初地上樂園に踏み入つて、初めて

感じた快美の景觀も少女マテルダの優雅な姿も、一切はベアトリチエの犯し難い威嚴に壓倒されてしまふ。實に地上樂園は從來他人の受難や苦行を見聞して來たダンテが、今回は自分自身の過誤に對して悔ひ改めねばならぬ場處なのであつた。そこは人間に取つて最も深い自己反省の場所である、自からの心に鞭うつ受難の幕である。嚮にバオロフランチェスカの悲戀に同情して、悲みの餘り死人の如くなつて倒れたダンテは、(Inf. V.)此の地上樂園に於てそれに勝る幾層倍かの惱みに責められた。それはダンテの心に取つて最も苦しい試練であつた、場所は樂園ではあるが、ダンテに取つてそれは最後の淨罪の場所であり、又糺斷の法庭でもあつた。

此のダンテの地上樂園を、中世傳説に現はれたそれに比較して何れ程の差異があらうか。彼の宗教的な併し美しい夢幻世界は、こゝに至つて極め

て深い倫理的意義をもつ樂園となつた。地上樂園は一般に信せられる所では、常緑の樹林に蔽はれ美果と芳香とに満ちて居る、ダンテの地上樂園も亦それ等の要件を備へては居るが、併しそれ等はベアトリチエの崇高な姿と、緑の眼の輝きの前にすべて消え去つたかの觀がある。其の峻嚴な意味をもつ樂園に入ることは、單なる探檢的好奇心を満足させんための觀光ではなくして、眞の人間救濟の準備を完成せん爲めの修行である、即ちそこは清淨無垢の天國に入らん爲めの前庭に外ならぬ。

かくしてダンテの地上樂園は、人が永くそこに留まつて無限の地上的幸福を享ける場所ではなくして、たゞ眞の天國に入る爲め通過すべき場所に過ぎないのである。一意たゞ窮極の聖地に憧がれて途上の何物にも眼を觸れない巡禮者の群れが、黙々としてフイレンツェの町を過ぎて行くが如く

(Vita Nuova, XI)、地上樂園も亦天國への一過程に過ぎない、その美觀に心を留める暇は與へられないのである。我等はそこにダンテの地上樂園の眞摯と嚴肅とを深く感ずると共に、ダンテその人の峻烈なる性格をも認めざるを得ない。神の正義の此世に實現されんことを叫んで已まないダンテの眞摯な心は、實に地上樂園をも嚴肅なものとしなければ已まなかつた。そこに新時代の黎明を告げる新人ダンテの姿が明かに認められるであらう。此の意味に於てもダンテは又文藝復興の先驅者でなければならぬ。

五 Son 22 Sem

以上の見解からして興味ある一節をこゝに附記し置きたい。それは淨罪篇第三十歌の一句である。前に述べた如くベアトリチエは第三十歌第七十三行に於て、『われを見よ、われは實にベアトリチエなり』と語つて居るが、此の一句に就ては、

「神曲」の本文に多少の差異が認められる。伊太利のダンテ協會が採用して居る本文には

Guardaci beni Ben Son, ben Son Beatrice.

とあるが、Moore の本文には

Guardaci beni Ben Sem, ben Sem Beatrice.

とある。此の點に於ては古くから一定して居らな
い、Codice Trivulziano の古寫本には Son とあり、
多くの學者も Son を採用して居るが、舊版本の内
にも又 Moore, Scartazzini 等の近代學者の内にも
Sem を採用して居るものが少くない。但し Son を
採用するもの内には、Guardaci の代りに Guar-
danni を用ゐて居る本文もある。しかし Guardaci
と Guardanni との差、即ち ci と ni との差は大し
た問題ではあるまいと思ふ。ni は「私」の意味で
あるが、ci は「我等」ともなり又「こん」もなる、
従つて Guardaci の場合でも「こんを看よ」と譯す
れば、Guardanni の「我を看よ」と云ふ意味と一致

し得るのである。

しかし Son と Sem との差は問題となり得る。

Son は「私はある」で、英語の I am に當り、Sem
は「我々はある」で we are である、即ち單數と復
數との差がある。ベアトリチェがダンテに向つて
「私はベアトリチェである」と云ふのは別に不思議
はないが、「我々はベアトリチェである」と云ふ復
數を使ふのは異様に感ぜられる。但し普通の人間
を超越せる神的なるもの、例へば帝王の如きもの
は、自分自から複數の名稱を用ゐて「我々」と呼ぶ
のであるが、ベアトリチェが Sem の語を用ゐて居
るのは、自から神的なる威嚴を示した結果に外な
らぬのである。即ち Son にせよ、Sem にせよ、「自
分はベアトリチェである」と云ふ意味には變りは
ないが、ダンテに向つて此く語るベアトリチェの
態度には、Son と Sem との間には少からぬ間隔が
あるのである。

ダンテの地上樂園が上述した如き極めて嚴肅な意味をもつものとすれば、ベアトリチエが堂々たる帝王的威嚴を以てダンテに臨んだことは、如何にも當然なことと思はれる。然して Son Beatrice と云つて親密な態度を示すよりも、Sem Beatrice と云つた方がダンテを詰責するのに適はしいと考へられる。固より此の詰責の場合に於ても、ベアトリチエが親密な態度を執つたとしても決して無理はないのであるが、此の場合近づき難い威嚴を示す方がより適當かと思はれる。従つて Sem を用ゐる方に左袒したくも考へられるが、近代のダンテ學者が多くは Son を採用して居ることより考へると、此の問題は遽かに決定することは困難となる。目下の場合、たゞ兩様の本文があることを記して、疑問として保留して置く以上のことは不可能であらう。

この小篇は昭和四年十二月京都帝大の伊太利會で試みた講演

ダンテの地上樂園 (大類)

の要旨に、多少の補足を加へたものである。地上樂園に關しては E. Coli, "Paradiso Terrestre Dantesco" に負ふ所が最も多い。なほ Alessandro d'Ancona の論文 (Scritti Danteschi 所收) や Dods, "Forerunners of Dante" にも参照した。なほ Scartozzini, "Dante Handbuch", Grandgent "Dante", Moore, "Studies in Dante" Vol. III, 等にも地上樂園に關する記述がある。但し中世樂園傳説に就ては A. Graf, "Miti, Leggende e Superstizioni del Medio Evo." の記述が詳かである。